



ひだかがわいりあいざくら
日高川入相花王

八王子車人形

八王子の車人形は、東京都を代表する伝統人形芝居である。海外公演も多数行い、今では日本を代表する民族文化財といえる。

しかし、半世紀前は観客を集めるのに苦勞を強いられ、語りの説経節に至っては、風前の灯火という状態であった。そこで、五代目西川古柳を中心に、市民、行政それに研究者が協力し合い地保存・伝承に尽力した。おかげで今日の八王子車人形の繁栄に繋がったといえる。

八王子車人形は、多くの人々が関わり環境整備を行い、国内外に発信出来るまでになった。難題の多い伝承文化に、一条の光が差したと言える。

八王子車人形は、国の選択無形文化財、東京都の指定無形文化財である。

◇散歩のみどころ

都道六十一号線山田宮の前線のグリーンタウン入口バス停から小田野城跡、御嶽神社まで凡そ4kmの行程。バス停を出発し、八王子城の出城で、北条氏照の家臣小田野源太左衛門の小田野城跡を見学。そこから鎌倉古道に出て少し歩くと、松姫と縁の深い心源院に着く。寺から再度鎌倉古道に出て、陣馬街道へと歩く。その街道筋に世界的に有名な写真家前田真三の生家がある。屋敷門を見ながら街道を少し下ると、左側に二十三夜塔、さらに庚申塔が建っている。街道を戻り、少し先を左に曲がると陣馬街道で一番古い場所に出る。ここが、八王子車人形の西川古柳座稽古場である。また街道を戻り左へ曲がる。民家を過ぎ、農道を抜けた所が御嶽神社である。百八灯のろうそく祭りで有名。神社参拝後、山田宮の前線、恩方上宿バス停で解散。

①小田野城跡 国

西寺方町一四五外

小田野城址は、八王子城の出城と考えられ、北条氏照の家臣小田野源太左衛門屋敷跡の伝承をもつ戦国時代の城郭跡である。案下道（陣馬街道）を見下ろす防御拠点に位置し、独立丘状の地形を利用して築かれ、八王子城城落と共に荒廃したと考えられる。

主郭部分は広範囲にわたり、後世の改変を受けているため、往時の状態は明確ではない。二ヶ所の郭構成であったと推定され、その周囲に数段の腰曲輪があったかと思われる。昭和五十四年から五十五年（一九七九～八〇）に行われた本調査では、北側に二段の腰曲輪、南側では土橋、堀、枳形状遺構など防御施設が発見され、陶磁器類の破片や古銭、鉄砲の弾などが出土している。



鎌倉古道



小田野トンネル 国道61号線



土塁または遺構跡



小野田城跡（城上の広場）



枡形状遺構（北西より）



小田野城跡調査の全景
（東側より）



土橋（東より）



腰曲輪（北より）

② 深澤山心源院

下恩方町一九七〇

宗派 曹洞宗

本尊 釋迦如来

寺宝 四脚門（室町時代の古建造）

開基 大石道俊定久

開創 延喜年間（九〇一〜二三）

戦国時代には北条氏照などの在地武士階級の帰依を受け繁栄した。天正十年（一五八二）、当時の住職ト山舜悦（随翁）は武田信玄の娘松姫を手厚く擁護した。寺の門前には、川原宿の名主関口八兵衛が寄進した六地藏が建っている。寺内の墓地には、下原刀匠山本照重一家の墓、天然理心流の山本満次郎最武の墓がある。山門近くには、この地域で医術に貢献した小谷田子寅の碑が建っている。



六地藏の中で一番大きな地藏



心源院本堂



四脚門

● ト山舜悦和尚

舜悦和尚は名を随翁といい、ト山と号した。永正四年（一五〇七）二月五日南多摩郡川口村奈良原（現在八王子市檜原町）の農家に生まれた。舜悦の母は靈感で身籠ったという。母の両親は、その夫が分らないまま産まれたことを強くはじて母を追い出してしまった。母は児を背負い越津（小津）の山中をさ迷い（山入村、美山町説もある）思い余って我が児を滝の沢辺りの老松の根元に捨てた。三日後、再び捨てた場所へもどってみると、児はすこぶる元気なのに驚き、家に連れ帰り大切に育てたという。また、一説には、方丈さんに拾われたという。捨てた場所を今でも「餓鬼ガ谷戸」と呼ぶ。

成長するにつけ聡明であり、書は一覧してよく記憶する程であった。十三歳の時、山田の広園寺に出家し翌年落髪して具戒を受ける。その後諸方を遊曆する。天文六年（一五三

七)の秋、舜悦三十一歳の時、越前(福井県)の永平寺で承陽大師(じようようだいし)の道元の諡号から法を受け、修道大に進む。

弘治年間(一五五五〜五八)恩方村(八王子市下恩方町)心源院に帰る。この時、北条氏照はまだ滝山城にいたが、既にその高風を慕って親しく教えを受けたという。その後、八王子城に移っても和尚を深く帰依し、「朝遊軒」という一屋を城内に設け、武将等と共に和尚の話に心酔したという。北条氏照が八王子城主として、その高名を謳われた所以の一つに舜悦の力は大い。当時、氏照の夫人比佐、信玄の息女松姫、片倉城主大江備中守師親、千人同心組頭石坂森信らも和尚から教えを受けたという。

これより先、氏照は永禄九年(一五六六)牛頭山(朝遊山)宗関寺を創建し、舜悦を請いて開法した。相州小田原城主北条氏康も和尚を城中に招き、終日法を問ひ、戒を受けた

という。また百五代正親町天皇より、仏国普照禅師の勅号と紫衣を賜っている。これらを見ても、ト山舜悦が如何に偉大な禅僧であったかが解る。天正元年(一五七三)の秋、和尚は心源院に遷り、天正十七年(一五八九)には遠州(静岡県)石雲寺、翌年牛頭(宗関寺)に帰った。暫くして再び遊方し、至る所で化導した。郡人の地をすて禅宇を多く建てた。宝樹寺(裏高尾町)、暉窓寺(下恩方町、廃寺)興岳寺(千人町)、雲竜寺(山田町)、良泉寺(上恩方町、廃寺)、信松院(台町)の諸刹は舜悦和尚が第一世となる。寛永元年(一六二四)秋、宗関瑞聖に赴き、寛永三年(一六二六)十月二十六日入定帰寂。時に百二十歳古今まれに見る高齢であった。



ト山舜悦和尚の墓
後方ひだりより六番目



ト山舜悦和尚

●松姫の生涯

松姫は、永禄四年（一五六一）に府中（山梨県甲府市）のつつじが崎の屋敷で生まれた。父親は戦国時代の武将で、甲斐の国を中心に活躍した武田信玄。母親は、油川信友の娘で油川夫人と呼ばれていた人である。永禄十年（一五六七）十一月、松姫七歳の時に織田信長の長男信忠（十一歳、奇妙丸）と婚約した。元亀二年（一五七二）、松姫十一歳の時に、母油川夫人が亡くなる。翌年には、武田家と織田家が敵、味方に分かれてしまい、信忠との婚約も解消された。さらに天正元年（一五七三）四月には信玄が亡くなる。織田家は武田家を滅ぼそうと攻めるようになった。武田家が滅亡する天正十年（一五八二）一月下旬から三月下旬ころ、松姫は高遠城の兄、仁科盛信のもとに身を寄せていたが、織田軍の武田征伐が始まり、戦禍を避けるため、盛信の三歳の姫、新府城

の勝頼の四歳の姫、人質として預かっていた小山田信茂の養女四歳の姫三人と、少数の供を連れ金照庵へと旅立った。この年の六月二日、本能寺の変が起こり、信忠が亡くなった。同年の秋、金照庵から心源院（八王子市下恩方町）に移った松姫は剃髪し、名を「信松尼」と改め、信忠をはじめ武田家一族の冥福を祈った。心源院で八年間の修業を積み、天正十八年（一五九〇）の秋、御所水の里（八王子市台町）のあばら家に移り住んだ。尼としての生活を送りながら、姫たちを育てた。収入は、寺子屋で近所の子どもたちに読み書きを教え、織物を作ることで得ていた。織物は、蚕を育て、糸を紡ぐことから始まり、織りまで一連の作業をこなしていた。

松姫の織り方が八王子織物の元になったと伝えられている。また、旧武田家家臣であり、当時江戸幕府代官頭の大久保長安や八王子千人同心の援助を受け、現在の八王子市台町

に信松院を開基。元和二年（一六一六）四月十六日死去。享年五十六歳。草庵は信松院となる。法名「信松院殿月峰永琴大禅定尼」

正徳四年（一七二四）松姫百回忌。松姫の兄の仁科盛信の子孫資真から小早川隆景が朝鮮出兵で使用した、軍船ひな形が寺に寄贈され、現在も残っている。信松尼の木像もこの頃作られた。この寺には、戦前まで境内に松姫が植えた松（案下峠の松）があったが、昭和二十年（一九四五）八月の八王子空襲で焼失している。



松姫坐像

こやたしいん

●小谷田子寅の碑

小谷田子寅は、千人同心の一人で、名を権右衛門昌亮と言う。宝暦十一年（一七六一）武蔵国多摩郡川口村（現・八王子市川口町）に生まれる。幼くして父親を亡くしたが、勉強に励み特に医学に明るかった。薬を乞う者、診断を求める者があとを絶たず、民衆に慕われていたという。この善徳を称えるため、天保七年（一八三六）に境内山門近くに碑を建てた。この碑は同心組頭塩野適斎の撰文、植田孟縉が揮毫ならびに刻字した大変貴重な碑である。碑面には三百八十六文字が刻んである。



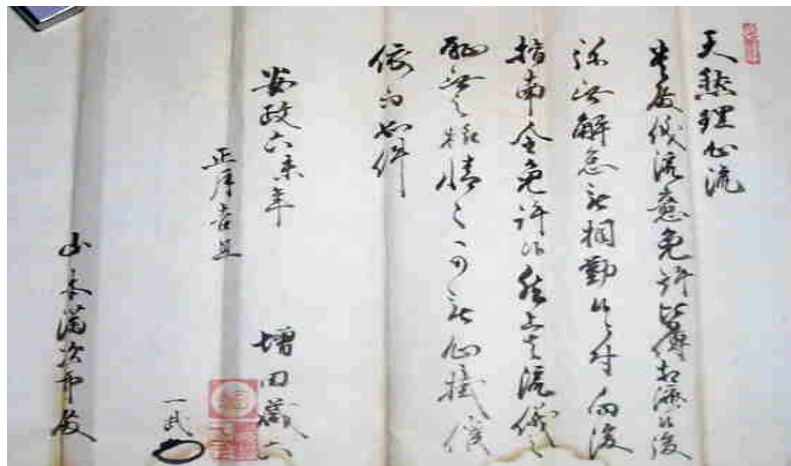
小谷田子寅の碑

●山本満次郎最武の墓

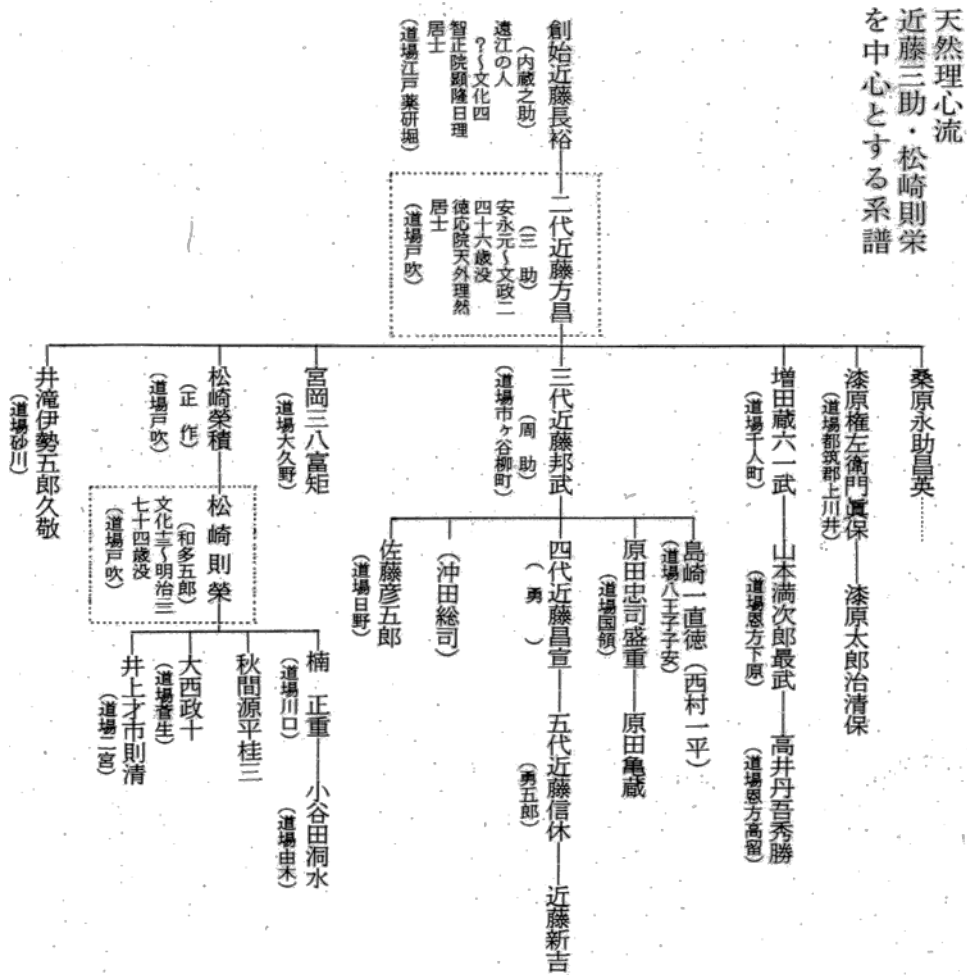
天然理心流四世山本満次郎最武の墓は、四脚門の脇にある。満次郎最武は、頭脳明晰な人であったといわれ、増田蔵六から指南免許を得た唯一の人物である。近藤三助、松崎則榮らの天然理心流を継ぎ、恩方下原の道場で門下生たちに天然理心流はもとより、静流薙刀、観世当流小謡、小笠原流諸礼躰方など幅広く教えていた。



山本満次郎最武の墓



山本満次郎免許皆伝の書



● 宇賀神

穀物の神。転じて福の神とされ、弁財天と同一視された。天女形の像が多い。また白蛇を神として祀ったもの、狐を神とする説もある。以前、心源院の宇賀神様の周りは池だったという。石の蛇像の首は無くなっている。



宇賀神像



石の蛇塚

●今も残るヒューム管

昭和二十九年農業電気揚水（十五馬力）が、国と都の補助金で小田野地区に完成した。小田野地区の水田耕作は、観栖寺前の芦が沢からの湧水を利用。動力ポンプで地下水を汲み上げ、灌漑用水として利用するものであった。段丘崖の横腹にヒューム管を通し、水は心源院の西を流れる北浅川からも汲み上げた。その長さは八百mに達し、用水の受益面積は約八haに及んだという。



今も残るヒューム管

●秋葉神社

祭神 軻遇突知命（かぐつちのみこと）
創建 不詳
例祭 八月十七日
元文二年（一七三七）、別当心源院二十一世及び関口八兵衛により社殿を造営。防火の神として崇敬されている。



秋葉神社

③写真家前田真三

下恩方町

前田真三は、大正十一年（一九二二）六月三日恩方村（現、下恩方町）に生まれた。昭和十六年（一九四一）府立織染学校（現都立八王子工業高校）卒業。拓殖大学開拓科入学。昭和二十三年（一九四八）日綿実業に入社。趣味として風景写真を撮っていた。昭和四十二年（一九六七）株式会社丹溪を設立し、写真活動に入る。昭和四十六年（一九七一）日本列島縦断撮影旅行を約三カ月にわたり敢行。その帰路、美瑛・上富良野の丘陵地帯に日本の新しい風景を発見。昭和四十九年（一九七四）はじめての写真集『ふるさとの四季』刊行。以後、風景写真の分野に新しい作風を確立し、数々の賞を受賞した。独特の感性で自然を切り撮った写真は前田調、丹溪調とも呼ばれた。

写真集には
・昭和五十一年「ふるさとの山河」

・昭和五十三年「春夏秋冬」
 ・昭和五十七年「山河有情」
 ・昭和五十八年「一木一草」
 ・昭和五十九年「上高地」
 その他、自然観を中心とした写真集を多数発表している。平成十年（一九九八）死去。享年七十六歳。



前田真三氏



前田真三の生家



梅の香薫る古道を行く



題名：春霞に煙る山里に桜ひそやか

前田真三写真集「田舎」より

④二十三夜塔

下恩方町

下弦の月の出を待つ秋の行事で、二十三夜の月待ちという。二十三日の夜、講中が集まり、勤行飲を供にして月の出を待つものである。

勢至菩薩の有縁日が二十三日で、この夜に礼拝を行うと、三体の菩薩が現れ一度に拝めるといふ。収穫祈願の原始宗教の一つといえる。この夜は、精進潔斎し、同衾（どうきん）を忌むとされており、庚申信仰と習合しているとも考えられている。

恩方地区の河原宿では、今でもロウソクを立て、供物を供えている。この地の二十三夜塔は、自然石に草書体で彫られた文字塔で、恩方地区では九塔が確認されている。



二十三夜塔

⑤ 庚申塔

下恩方町

庚申信仰の根幹は、人の体内にいる三尸（さんし）の虫が、六十日ごとに廻ってくる庚申の夜天に昇って、その人の罪過を天帝に告げ、そのせいで生命を縮められるとされるものである。そこで寝ずの番をするという道教の信仰から、健康長寿を祈念する信仰遊戯へとなったのである。特に室町時代には、道教と仏教の融合の結果、庚申待ちの講が結ばれるようになった。そして、庚申塔造立が始まったのである。

庚申待ちの行事や庚申塔造立は、人の延命招福にあるが、同時に村人達の連携にも繋がっていた。庚申塔は、江戸時代には多様な類型を取りながら、沖縄を除く全国各地に造立された。また、庚申講が維持されている地域もあるという。



庚申塔の各部名称



庚申塔



江戸中期～後期の庚申塔

江戸前期の庚申塔

⑥西川古流座

下恩方一五六六

前身は、瀬沼時太郎（二代目西川古柳）が、十八、九歳の頃、初代西川古柳に弟子入りしたことからはじまる。大正末から昭和初期にかけて、三田村鳶魚、平音次郎、河竹繁俊ら



様々な庚申塔（江戸後期）

の支援を受ける。はじめは、「西川連中」という名称を使って興行していたようであるが、昭和十三年の時太郎の記録では既に「八王子車人形」の呼称を使っている。古柳座の芸能は、初代西川古柳や、江戸の最後の人形遣い吉田冠十郎、文楽の吉田文昇らの指導を受けている。さらに、伝統的な車人形の操法を基礎として、新たな工夫を重ね、昭和五十六年には乙女文楽の技法を取り入れた「新車人形」を考案。さらに古柳座独自の用具なども考案して新作の上演も可能にしている。こうした様々な工夫を凝らし、伝統的な人形芝居を伝承するとともに、西川古柳座は日本各地、さらに諸外国にまで車人形の技法を通じて地域文化、日本文化を紹介している。

●車人形

車人形は「ろくろ車」という、前に二個、後ろに一個の車輪がついた箱形の車に腰掛けて、一人の人形遣いが、一体の人形を繰る特殊な人形芝居。

江戸時代の終わり頃、現在の埼玉県飯能市に生まれた山岸柳吉（初代西川古柳）が考案し、その後、近郊の神楽師（神事芸能を専業とする人）を中心に、農山村や八王子織物の生産に関わる人の娯楽として親しまれてきた。

ろくろ車の発明は、それまでにあった江戸系の三人遣いの人形芝居を合理化したもので、少人数の座員で簡易な舞台での公演を可能にした。また、舞台を選ばないことから、他の芸能との共演も可能で、演出の幅が広いのも特徴。演目は伝説や、歴史上の人物に題材を得たものから、比較的新しい物語、そして洋舞まで八王子車人形の演目は多岐に渡る。

代表的なものには、三番叟、東海道中膝栗毛、佐倉義民伝 宗吾と甚兵衛、葛の葉、傾城阿波の鳴門などがある。

現在は、八王子市の西川古柳座のほか、埼玉県三芳町の竹間沢、東京都西多摩郡奥多摩町の川野に車人形は伝えられている。



三番叟（さんばそう）



日高川入相花王（渡しの段）



東海道中膝栗毛



足

人形のかかについている「かかり」を遣い手の足の間に挟んで、人形の足を動かす。この工夫で、人形の足が直接舞台を踏むことができる。



ろくろ車

箱の中の前に二輪、後ろに一輪の車輪がついている。後方の車輪は幅広で中央が膨らんでいて、体重をかけると自由に方向転換できる。



首 (かしら)

使い手は左手で人形の左手と首をもって扱う。
この人形の左手に工夫がある。



手

右手は使い手が右手で持って直接動かす。
左手は「弓手 (ゆんで)」といって、肘の部分にクジラのひげがバネとして仕込まれていて、右手首にかけた紐と首を持った左手の指で巧みに操る。



佐倉義民伝



葛の葉

●説経浄瑠璃

説経、あるいは説経節は本来仏教伝道のひとつの手段であったが、やがて芸能化し、江戸時代に入って人形芝居と提携して興行を始めた。浄瑠璃に影響を与え、浄瑠璃の中には説経節の曲節を取り入れている曲もあり、それらを「説経浄瑠璃」とも称するが、説経節と浄瑠璃は本来別のものである。

説経節の内容は霊驗物などに限られていたため、次々と新機軸を取り入れる浄瑠璃に圧倒されて衰退した。その説経節が復活したのは寛政年間（一七八九〜一八〇一）で、幕末に多摩地方に伝わり土着した。八王子車人形とともに行われていた薩摩派の説経節も、この頃に生まれた際文と説経を組み合わせた「説経際文」が薩摩派を名乗ったことにはじまる。八王子の説経節は大正昭和初期に隆盛した後衰退した。現在は昭和六十一年に発足した「説経節の会」が

復興伝承に努めている。



説教浄瑠璃の本

●三田村 鳶魚

みたむらえんぎよ
江戸風俗研究者、鳶魚は八王子の伝統芸能、車人形を世に知らしめた人物である。

明治三年（一八七〇）三月、大横町の織物買継商の家に生まれた鳶魚は、本名を、玄龍（げんりゅう）といった。幼少のころ、僧になるため広園寺（山田町）に入山したが、兄の死により還俗（げんぞく）。長じて私塾に学び、明治二十年（一八八七）自由民権運動に身を投じた後、新聞や雑誌にたびたび寄稿。江戸の風俗、文化の研究に頭角をあらわした。

明治末期からは研究に没頭。江戸時代の風俗、文化研究、時代考証の第一人者といわれるまでになり、その成果は後に「三田村鳶魚全集」二十七卷、別巻一としてまとめられた。大正十三年（一九二四）には劇作家、坪内逍遙を八王子に招いて車人形を観賞。感動した逍遙によって東京公演が実現、中央に車人形が紹介された。

昭和二十七年（一九五二）五月疎開先の山梨県下部で没した。享年八十二歳。

⑦御嶽神社

下恩方

勸請 不明
祭神 少彦名命

大己貴命

大山祇命

例祭 百八灯（四月第二土曜日）

創建年代は明らかでないが、寛文七年（一六六七）に勸請したとの伝承がある。

現在の社殿は、貞享四年（一六八七）再建された。境内には、菅原神社も合祀されている。



御嶽神社鳥居



太子堂



御嶽神社

●百八灯

河原宿御嶽神社の例祭に行われる。先祖供養とは切り離された形でなされているという点で珍しく、しかもそれが御嶽山信仰とも結びつき、御嶽神社の春祭りの一環としてなされてきたところに特色がある。

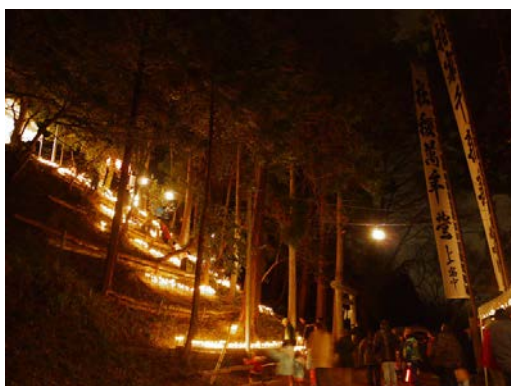
百八灯とは、人間の百八つの煩惱をぬぐい去るとともに、豊穰・家内



聖徳太子像

安全を祈願するものである。戦前は難病平癒を祈願してロウソクを奉納する人々が多く見られたが、第二次大戦中は出征者の無事祈願の意を込めて、諸願成就のための祈りの儀式として、氏子らが一本ずつ灯明を奉納してきたという。昭和十八年〜十九年（一九四三〜一九四四）頃には軍の命令による灯火管制で、百八灯の行事も禁止された。復活したのは四十年後の昭和五十六年（一九八二）のこと、地元の馬場源五郎氏（八王子市下恩方町）らの呼びかけと尽力によって実現することとなった。

この年の百八灯では四千本ものロウソクがともされ、新聞にも大きく取り上げられた。石段両側の斜面上には、氏子らによつて次々にロウソクがともされていき、下から見ると暗闇の中に小さな灯火が満天の星のようにきらめいて、実に美しく、幻想的で神秘的な雰囲気につつまれる。



八百灯祭



御神楽



八百灯祭

◎参考資料

- ・ 東京都の歴史散歩 山川出版
- ・ 夕焼けの里を訪ねて
- ・ 恩方の歴史を知る会
- ・ 八王子辞典
- ・ 歴史と浪漫の散歩道
- ・ 歴史散歩事典
- ・ 八王子市史
- ・ 新編武蔵風土記稿
- ・ 八王子の歴史と文化
- ・ 大日本人名辞書
- ・ 古文書を探る会案内書
- ・ インターネット各ページ
- ・ 昭文社地図
- ・ 八王子観光マップ
- ・ 八王子市地図

現存人形操り分類

